

片山洋子・小川政弘作 「奪われた遊び」

<前編>「夜の公園」

(効果音) (塾のガヤ)

斎藤光先生 …ということになるわけなんだ。じゃ、これを応用して、テキストの問題をやってみよう。はい、始めて！

生徒たち (ガヤ)

石井純子モノローグ うーんと、えーと、AとBの位置の差が50メートルで、AがC点に行ったのが12秒で、えーと、えーと…。

生徒たち (口々に)「はい、先生できました」「できた！」「できました！」

純子モノローグ えー、ちょっと待ってよ。分かんないよ！ だから、AとBの速さは…。

斎藤先生 よーし、みんなできたようだな。じゃ、問題を解いてもらおうかな。

純子モノローグ えーとだから、AとBの速さは…。

斎藤先生 じゃあ石田、どうだ？

純子 は？ 家、あの、あのまだ…。

斎藤先生 まだ解けてないのか？ この問題は夏期講習でもやったんだけど、石田、お前もやったよな、確か？

純子 え？ あ、そうでしたっけ。(苦笑い)

生徒たち (笑い)

純子モノローグ ゲー。サイテー。みっともないなあ。

純子ナレーション 新学期そうそう、皆に笑われてるわたし。名前は石田純子。青春中学2年の女の子です。夏休み中の塾の勉強なんて、もうとっくにプツツン。始めから、ほかの遊びのことばっか考えてたから、頭にちっとも残ってなくてねえ。あーあ、ちょっと困ってしまうよ。

(効果音) (終業のチャイム)

生徒たち (口々に)「バイバイ」「さよなら」「またね」

(効果音) (街の雑踏)

純子 あーあ、参ったなあ。分かんないよお。歩^{あゆみ}、分かった？ 今日のどこ。

西川歩 まあ、少しね。夏期講習のときはマジにやってたからさ。

純子 えー、いいな。わたし、ダメー。

歩 あの時だけだってば。そのあと、遊んじやったから。ほかはダメだよ。

純子 そのあと？ あー、そうだったね。歩みは8月に式根島に行ったんだっけ。アブないとこ行っちゃって、大丈夫なの、あっちのほう？

歩 平気、平気。ガキなんかこさえないように、ちゃーんと研究してんだから。

純子 へーえ、すごいんだ。あ、あれ、何してんだろう。

(効果音) (子供のはしゃぐ声)

歩 何？ どこ？

純子 ほら、あそこ。あの公園の中。

歩 え、公園？ あれー、夜なのに、ガキたちが遊んでんじゃん。

ナレーション よく見ると、その子たちは、わたしの塾の小学生たちだ。ブランコや滑り台ではしゃぎ回ってる。楽しそうな顔しちゃって。

歩 なんか、気味悪いね、純子。

純子 そう？ かわいいじゃん。でも、確かになんかフツーじゃないね。

ナレーション 妙な気分だった。なんて言うか、舞台の登場人物はそのまま残して、バックの昼と夜をそっくりすり替えたような光景。夢の世界を見ているようで、そのくせ妙に現実的で、納得いっちゃうような感じが怖かった。

(効果音) (ドアの開く音)

純子 ただいま。

母 あら、純子ちゃん、お帰り。今、駅まで迎えに行こうかと思ってたところ。

純子 ああ、いいのにママ。いつも塾の帰りは歩と一緒にんだから。大丈夫だよ。

父 でもなあ、夜の10時過ぎに女の子二人っていうのは危ないからな。

純子 あ、そうだ。ねえパパ、さっきね、ヘンなの見たんだ。

父 ん？ ヘンな男がいたのか？

母 あら、ヤだ。怖いわね。

純子 え？ 違う、違う。変なのっていうのはね、公園なの。公園でね、小学生5、6人が遊んでるの。夜に。

母 まあ、この夜に？ なんなんですよ。

父 はあー、今の子のやることは理解できんな。おれの子供時代は、メンコにベーゴマとか缶けりとか、昼日中走り回って遊んでたもんだがな。なあ、ママ。

母 わたしたちは、女の子でよくお手玉とかおはじきとか。いずれにしろ、夜、外で遊ぶなんて、考えもしませんでしたよ。

弟誠 (あくび) 僕の小学校の先生は、たくさん遊べって言うよ。遊ぶことが勉強なんだって。いっぱい遊ばないと頭もよくななんないんだって。

母 誠ちゃん。いつの間に起きてきたの？ さ、早く寝ましょ。

父 いや、誠もいいこと言うな。そうだよな。子供は遊ぶのが仕事だ。小さい時は遊んで、いろんなことを覚えていくからなあ。今のうちにたくさん遊んで、頭を浴しておけよ、な、誠。

誠 うん。僕、いっぱい遊んでる！

純子 いいよなあ、誠は。まだ小さいからたくさん好きに遊べてさ。小学校も5、6年になったら、もうムリだよ。夜の公園で遊んでるあの子たちの気持ち、分かるような気がするな。

母 何言ってんの。夜、あんな^{ひとけ}人気のない公園で遊ぶなんて。
純子 だって、昼間は遊ぶ時間がないんだもん。こんな時、光先生ならなんと
言うかな。

ナレーション 光先生。そう、あの塾の先生で、名前は齋藤光。今年25歳のバリバリ。なんでも
クリスチャンだそうで、その名のとおり、暗くなりがちなわたしたちの心にパツ
と“光”を投げかけてくれる。口には出さないけど、何かと頼りにしてるんです、
ほんとに。

次の日の夕方、塾で――。

(効果音) (始業のチャイム。教室のガヤ)

光先生 今日はね、始めに頭がよくなる話をしよう。

生徒たち (口々に)「えー」「何それ?」「やって、やって!」「ウソー」

光先生 みんなの中で、砂遊びとか、泥んこ遊びをしたことのある人は手を挙げて。

生徒たち (口々に)「はい!」「みんなやるよな」「だれだってね」

光先生 いいや、そうでもないんだぞ。小さいに時そういう経験をしなかった人はね、精
神的、情緒的に安定してないんだそうさ。そりゃそうさ。子供はちゃんと子供
やって、いっちょ前の大人になる。それをちゃんとやってないと、大きくなっても、
何か大事な忘れ物したみたいに、あるいは十分土台を固めないうちにコンクリ
ート積み上げたビルみたいに、心ん中ポカーッと穴開いたように落ち着かない
わけよ。中にはね、中学生になってから泥遊びを始めるんだって。それも自分
のオシリから出るものをこねて。

生徒たち (口々に)「えー!」「キヤー!」「ウソー!」「きたね」「信じらんない!」

光先生 本当の話だよ、これ。君たちは大丈夫かな?

生徒たち 「じよ、冗談」「やるわけねーだろ」

光先生 (笑い)ちよつと落ちたな。ま、それほど砂いじり、泥んこ遊びが人間には必要
だってことだ。おれ、思うんだけど、人間は神様によって土からつくられたろ。

生徒 えー、親からだろ。

光先生 先生の言うてんのは、一番最初の人間のことだ。

生徒 そんなら猿じゃん。

光先生 違う、土だ。聖書にちゃんと書いてある。だから人間は、土を恋しがるって言う
か、その感触にホッと心が休まるんじゃないかな。魂のふるさとに帰ったような
気がするんじゃないかな。だから、君たちも遊べ。寸暇を惜しんで遊べ。車の
ハンドルもブレーキも、“遊び”があつて初めて安全な、しっかりした運転ができ
るんだ。遊び人間は、先生大好きだ!

男子生徒 先生、話せるー! 今度野球やろうよ。

女子生徒 テニスがいい。

男子生徒 砂いじり!

男子生徒 バカか、お前は！
(間)

歩 ねえ、純子。今日の光先生の話、面白かったね。

純子 うん、ほんと。いろいろ考えちゃった。そうだ、歩。公園行ってみない？

歩 え、公園？ 砂遊びするの？

純子 ううん。砂遊びじゃなくてもさ、なんか、無性に遊んでみたくなっちゃった。

歩 うーん。よし、じゃ少しね。遅くなると家で怒られるから。

純子 オーケー。行こ、行こ。
(間)

歩 うわあ、久しぶり、ブランコなんて。なんか照れるなあ。

純子 ヤッホー歩。高いよ、この滑り台。うわ、幅が狭いな。オシリいっぱいだ。それー！

歩 (笑い)やだ、純子ったら、ガキみたい。

純子 何よ、歩だって。
(二人、笑いはしゃぐ。)

ナレーション 始めは、なんだか照れながら遊んでいたけれど、夜ということもあって、だれも見えていない安心感と開放感に、わたしたちはふっと子供に返っていたみたい。気がついたら1時間近くもたっていた。

純子モノローグ (走りながら)わあ、怒られちゃう。どうしよう。公園で遊んでたなんて言えないし…。どうしよう。

純子 ただいま。

母 純子ちゃん！ どうしたの？ いつもより遅いから心配してたのよ。

純子 (荒い息遣い)ごめんなさい。ちょっと質問してて、塾出たのが遅くなっちゃったの。だから走って帰ってきたじゃん。

父 しかしなあ、遅くなるんなら電話でも入れなさい。11時近くじゃ危ないぞ。

母 そうよ。ママ駅まで迎えに行っておけるから。

純子 うーん、大丈夫だってば。(あくび)今日はもう疲れちゃった。お休み。

母、父 「ちょっと、純子ちゃん」「純子」

ナレーション 久しぶりに運動をしたせいか、とてもすっきりと眠れた。パパとママにはウソをついちゃったけど、また行きたいな、夜の公園。だって、なんだか落ち着くんだもん。
次の日、わたしは歩とまた後援へ行くことにした。

歩 ねえ、純子。おなかすいちゃうからさ、セカンドキッチンでバーガー買っていこうよ。

純子 うん、いいね。コーラも。

ナレーション 当然、また帰宅は11時ごろになった。

父 なんだ、今日も遅いじゃないか。

母 勉強たくさんするのはいいけど、中学生の女の子の11時はちょっとねえ。ご近所に何か言われたりしたら…。

純子 だって、しょうがないじゃない。塾行ってるんだからいいでしょ。

父 だれもが塾で遅いと思ってくれるとは限らんぞ。よそ様に、夜遊びしてるって見られたらどうするんだ？

純子 夜遊び？ パパもママも体面を気にしてるんだ。いつも危ないからって言ってたけど、そうじゃないのね。

父 お前だって、不良みたいに言われたくないだろ？ それを心配してるんじゃないか。明日からは、10時半にはカギをかけるからな。それまでには必ず帰ってくるんだぞ。

母 そうよ、純子。あなたにもしものことがあったら、取り返しがつかないでしょ。一生懸命勉強して、終わったらまっすぐ帰ればいいのよ。

父 ママの教育が悪いんだ。塾なんかやめさせてしまえ。

母 何を言うの？ 学校の先生が、「塾へ行かないといい学校へは行けない」っておっしゃったのよ。

純子 やめてよ、もう。塾なんかやめるわよ。そのほうがずっと楽よ。

父 そして輪をかけて遊ぶのか？ ああ？

純子 今までだって、遊ぶ時間はなかったわ。学校行って、クラブやって帰ったら、すぐ塾へ行って…。いつ遊べるって言うの？ どこで遊べるって言うの？ わたしの自由な時間は塾の終わった夜だけ。そんな時間に遊べるのは、公園だけよ。わたしに残されてるのは、夜の公園だけ！

父母 「待ちなさい」「純子、待ちなさい！」「純…」

ナレーション わたしは、外へ飛び出していた。そして、シーンと静まり返った夜の道を、わたしはただやみくもに走っていた。

<後編>「もがき」

ナレーション わたし、石田純子。青春中学2年生。学校とクラブ、家に帰れば夜の塾。そんな“遊びを奪われた”毎日の生活で、心のよりどころは塾の斎藤光先生だ。クリスチャンで、何かって言うと聖書を持ち出して、上からビシッと決められちゃうのが玉にキズだけど、でも、こっちの気持ち分かって、こっちの身になって言ってくれるから、大抵、素直にナットクしちゃう。その光先生の第一のお勧めは、“遊ぶ”こと。勉強ビシビシ教える先生が、マジな顔して“遊べ”なんて言うからおかしくなっちゃうけど、でもそんな先生、好きだなあ。うちのパパとママときたら、もうできるだけ勉強させて、いい学校入れて、金持ちの御曹司と結婚させて…、そんなことしか考えてないから、ほんと、イヤになっちゃう。そんなうちん中

の空気がだんだん息苦しくなってきたところへ、大好きな光先生の“遊びの勧め”もあって、わたしは親友の歩と、塾の終わったあとの“夜の公園遊び”にのめり込んでいった。そしてある夜、両親と激しく衝突したわたしは、気がついたら家を飛び出して、夜の道を走っていた。

(音楽) (次のセリフのBGM。不安、怒り、焦りを表現したテンポの激しい曲)

純子 パパなんか、ママなんか、死んじまえ！ 自分たちの体面のことばっか考えて、わたしのことなんかちっとも考えてくれない。親の言うとおりに、勉強して、いい点取って、いい子いい子してれば、それで満足なんだから。それじゃ、それじゃこのわたしは一体なんなの？！(多重エコー)

純子モノローグ いいよ。こうなったら遊んでやる。バイクでも、ディスコでも…。もういい、歩みたいにだれかいい子見つけて、Cまで行ってやるんだ。“いい子ちゃん人形”になんか、もう絶対ならない！

ナレーション その時だった。

東山俊夫 ねえねえ、君、そんなとこでくすぶってないでさ、もっとスカッとしてみない？

ナレーション 目の前に、すらっと足の伸びた男の子が、バイクにまたがってこっちを見ていた。一目で好きになった。我ながら、なんて軽いんだろう。でも、ほんとはだれでもよかったのだ。彼の名は東山俊夫といった。高校を、この春2年で中退し、目下親のスネかじりでブラブラしていると言う。わたしは、問われるままに、うちのこと、今の自分のムシヤクシヤした気持ちなどを話し、すっかり心を許していた。

(効果音) (「ブルルーン」というバイクのスターターの音)

俊夫 純子、しっかりつかまってるよ。

純子 オーケー！

(効果音) (バイク勢いよく発進)

純子 もっとお、もっと飛ばして！ あのベンツ抜いてよ！

俊夫 よーし、見てろ。それ！

(効果音) (バイク音、つんざくように高く)

俊夫、純子 (口々に)「キャッホー！」「やったあ！」

ナレーション 夜の街をすっ飛ばしたあと、わたしたちは、あの夜の公園に来ていた。

(効果音) (ライターの点火音。俊夫がタバコを吸い込み、「ふー」と吐き出す音)

純子 タバコ、おいしそう。俊夫、いつから？

俊夫 ん？ 中2かな。おやじのタバコ、2、3本くすねてさ。

純子 ふーん。わたしと同じ年だ。ちょっと吸わして。

俊夫 平気かよ。最初はあんまし、うまかねえぞ。

純子 吸ってみたいの。ちょうだい。(吸い込んで)うっ(激しくむせる)

俊夫 (純子の肩をたたきながら)ほらほら、だから言ったろ？ いきなりそんなに深く

吸い込むからだよ。

純子 …あー苦しい。でも、俊夫みたいに吸ってみたかったの。

ナレーション ほんとは頭がクラクラし、吐きそうだった。「こんなの、どこがいいんだろう」と思った。でも、これで俊夫とおんなじになれたようで、大人の世界に一歩足を踏み入れたような気がして、ちょっぴりうれしかった。その時だった。

俊夫 純子

ナレーション 振り返ったら、俊夫の顔が目の前にあって、わたしは彼の腕に抱き締められていた。

純子 と、俊夫君…。

ナレーション そう言いかけたわたしの唇は、すばやく俊夫に奪われていた。(間)

まだ胸がドキドキしている。いつかそのうちに、どこかで、俊夫の胸に抱かれている自分を想像していた。「キスしてもいいか？」なんて聞かれたら、どうしよう”、なんて。それが、こんなにあつと言う間に、あっけなく終わってしまうなんて。

純子 俊夫…。わたしのこと、好き？

俊夫 ああ。好きさ。大好きだよ。

ナレーション その晩のことは、だれにも言わなかった。両親にも、歩みにも、そして光先生にも。俊夫とわたしの、二人だけの秘密にしておきたかったのだ。その日から、わたしはもう、手綱を引きちぎったジャジャ馬のようだった。

(音楽) (ナレーションの BGM で、ディスコ音楽)

ナレーション 親がおろおろするのをシリ目に、俊夫に誘われるまま、夜のバイク、タバコ、そしてディスコ。彼に言われるまま、スーパーで万引きをし、彼に喜ばれるように、化粧も覚えた。そして求められるままに唇を許して――。

今思えば、わたしはその時、破滅への道を一直線に進んでいた。言葉遣いまで、もういっばしの不良だった。そんなわたしのアブなさを、だれよりもよく知って、祈ってくれたのは光先生だった。

光先生 石田、今日は先生とちょっと話そうや。

純子 え？ でも、あの、うちに早く帰らないと。

光先生 ああ、それは大丈夫だ。先生から電話しといた。

石田、このごろ変わったな。塾も時々休むし、遅刻と早退は多いし。目いっぱい遊んでるそうじゃないか。

純子 うん、遊んでるよ。だって、「勉強ばっかすんな。遊べ」って言ったの、先生じゃない。

光先生 ああ、そりゃ確かに言ったさ。だが先生が言ったのは、夜の街を男の子とバイクで突っ走ったり、ディスコで踊ったりするような遊びじゃないぞ。石田、加々見で自分の顔見てみる。相手の男はきれいだと言うかもしれないけど、先生はそ

うは思わない。以前の、ニキビだらけのお前の顔のほうが、ずっと健康的で、先生好きだったな。

ナレーション ドキッとした。光先生は何もかも知ってる！ 歩がチクッたんだ。でも、先生の言ってることは、なぜか、悔しいけど当たっていて、先生の顔がまぶしくて耐えられなかった。

純子 わたしの顔がどうなったって、先生に関係ないでしょ。構わないで。あんた、塾の先生なんだから、親が月謝払って送り込んでくる生徒に勉強教えてりゃいいのよ。それとも、わたしがクラスで一人グレてるから、厄介なわけ？

光先生 バカ！（パシッと平手打ち）

純子 な、何すんのよ、先生！

光先生 石田、厄介だなんて、おれは一度だって思ったことはないぞ。おれの生徒は、皆、それぞれいいやつで、おれは大好きだ。それをお前は、お前ってやつは。

純子 先生…。

光先生 お前たちの力になるために教師ってのはいるんだぞ。そりやおれは、たかが塾の先生さ。だがな、おれにとっては、お前たち一人一人は、神様から預かった大事な宝物なんだ。その一人であるお前が、もがいている姿を見るのが、おれはつらいんだ。

純子 …もがく？

光先生 ああ。お前のは遊びじゃなくてもがきだ。ほかの皆は、お前がまるで花の間をヒラヒラ舞うチョウのように、自由で、うらやましく見えるかもしないけど、おれには、お前が突っ張れば突っ張るほど、暗い穴の中から必死になって這い出ようともがいてる、子猫のように見えてしょうがないんだ。違うか？

ナレーション ドキンと来た。穴の中の子猫の姿が、そんなこと思ってもみなかったけれど、見事に、今、余りにも見事に自分と重なったからだ。

光先生 だからこそ、力になりたい。お前の力になりたいんだよ。石田、突っ張るのはやめろ。「また聖書？」って言うかしらんが、先生が一番好きな言葉、おれ自身もがいていた時に救ってもらったイエス様の言葉をお前に贈るよ。「すべて、重荷を負って苦勞している者は、わたしのもとに來なさい。休ませてあげよう。」

純子 わたしのもとに… 休ませてあげよう。

ナレーション その時だった。

俊夫 おい、純子。あんまりおせえんで迎えに来たんだ。行こうぜ。

純子 俊夫…。

光先生 石田、行っちゃいかん。今行ったらおしまいだぞ。

俊夫 おい純、何してんだ。早く来いよ。

純子 先生。…ごめん。

(効果音) (バイクで走り去る音)
光先生 石田、行っちゃダメだ。待て、石田！
(効果音) (キーッという急ブレーキ音)
光先生 石田！ あー！
純子 待って、止め、止めてー！ せ、先生、光先生！
ナレーション 一瞬、時間が止まった。頭の中がグルグル渦を巻いて、何がどうなってるのかわからなかった。気がついたらわたしは、救急車の中で、血の気のうせた先生の顔を見つめていた。
純子 (泣きじゃくりながら)先生、死んじゃイヤ！ 死なないで、先生！
ナレーション カラッポになった頭の中に、その時、不思議にさっきの光先生の言葉が静かに響いてきた。
光先生 (エコー)「すべて、重荷を負って苦勞している者は、わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」
ナレーション その声を聞きながら、わたしは、自分のもがきが、間もなく終わるかもしれないと、心のどこかで思っていた。

<完>